随想

草食系男子

～草食系男子が増えた理由～

加藤　宏光

七月十日の朝日新聞に草食系男子についての談話が掲載されていた。七〇〇万年前に人類が誕生して以来、男子同士は戦うものとして位置付けられてきている。人類に準ずる生物である類人猿（類人猿は猿ではなく、人類に属するものなのだそうだ）のなかには雄同士が戦わないボノボ（ピグミーチンパンジー）もいる。しかし、有史以来人類は男同士の覇権争いを基軸として発展してきた。

俗に草食系男子という表現はもっぱら恋愛にガツガツしない男性を指して言う。さらにすべての事柄に対してガツガツしない生き方を草食系と称する傾向もある。

京大霊長類研究所の古市歴史教授は、先に述べたボノボの雄が覇権争いをしないのは、雌の社会的地位が高いことがそうさせると説く。ボノボの場合、雌の発情期が長く、雄が焦って交尾する必要がないそうである。

しかしチンパンジーではそうはいかない。雄はボスとなって自分の遺伝子を残す機会を独占しようとする。そして、人間の本能的な性格はチンパンジーに近いものであるそうな。人は覇権を争うことで発展し続けてきた生物であり、現在の草食系男子が、平和嗜好が強いのを免罪符として、《恋愛をはじめとしてすべてのことに対して強い欲望を感じない》といっては困る、と彼は主張する。

福島県に会津地鶏という地鶏がいる。現在は㈱会津地鶏ネットという組織が商材を育てつつあるが、一五年ほど前に県から特別の配慮で純系を分与して頂いた。この純系会津地鶏を平飼いで三〇羽ほどに増やしたことがある。二〇羽余りの雌と五～六羽の雄で群を形成していた。ご存じのように雄の鶏にもボスがいる。しかし、五～六羽も雄がいれば、どの雄がどれの次かは明確には判らない。

ある日のこと、著者は会津地鶏の群にひとむしりのハコベを与えた。著者としては我勝ちに争ってハコベを奪い合うものだと想像していた。しかし、投げ込まれたハコベを一番強いボスが独占するのである。そして、ボスは「コ・コ・コ・コ・」と雌鳥が孵ったばかりの雛を呼ぶように雌を呼ぶ。自分は一切食べようとしないで…。呼ばれた雌は我勝ちにひたすらハコベを奪い合う。第二番目の雄はどうするのか?!　二番目の雄はボスの目を盗んでハコベをかすめ取るのである。彼もボスと同じように、「コ・コ・コ・」と雌を呼ぶ。ところが、二番目の雄に呼ばれても雌は一羽も寄り付かないのである。しばらく、虚しく雌を

呼び続けた彼は諦めて自分でハコベを食べ始める。残った雄は、それぞれの順位に応じてハコベを盗むもののその場で自分で食べてしまう。

結局ボスはたくさんのハコベを独占するものの自分の口にはほとんど入らず、雌が奪い合って食べ、二番目は雌を呼ぶものの無視される。下位の雄は雌と同じく自分のことで精一杯。ボスは辛いのである。

翻って人間社会を考えてみる。著者の若かったころ、ボスは身を削って人望を支える努力をしていた。会社を含め社会的リーダーの姿勢を取り上げてもそのような傾向は強かったように感じられる。バサラの心を持っていたのであろう。

時代は移って現代。社会的リーダーも自分のことで精一杯。他人どころか自分の身の回りの人にさえ気を配る余裕がない。ボスに余裕がなければ憧れにはなりえない。近頃の若者は役職に付きたがらない、という。ボスへの憧れがないのであろう。

社会のリーダーになりたくないなら頑張る意義もない。こうして、何事にも積極性のない世代が生まれ、増殖してきているのであろうか?!

添田唖蝉坊（そえだあぜんぼう）という演歌師が金々節という歌を唄っている。

《金だ金々金だ。金だ金々、この世は金だ。金だ金だよ、誰がなんと言おうと、金だ金々、黄金万能。金だ力だ、力だ金だ。金だ金々、その金欲しや。欲しや欲しやの、顔色目色。見やれ血眼（ちまなこ）、熊鷹眼（くまたかまなこ）》。

彼はこの歌で、大正末期の拝金主義を痛烈に批判している。こうした反骨の志が歌い、それに拍手する大衆がいた時代と「金があれば何でもできる」とうそぶいたホリエモンを讃えて選挙に引き出した社会のリーダーが※跋扈（ばっこ）する今日を見比べると、草食系男子が増加するのも、むべなるかなと思えてくるのである。

※跋扈＝思うままにのさばる